

研究・調査報告書

報告書番号	担当
141	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名（原題／訳）	
Alcohol use among 13-year-old adolescents : Associated factors and perceptions. 13歳の青年期における飲酒 要因と認識の関係	
執筆者	
Fraga S, Sousa S, Ramos E, Dias S, Barros H.	
掲載誌（番号又は発行年月日）	
Public Health. 2011 Jul;125(7):448-56	
キーワード	
青年期 健康の行動様式 アルコールの使用 飲酒	
要 旨	
<p>目的： 13歳の青年期の代表的なサンプルにおいて、飲酒の頻度と決定要因を記述することとこの課題を青年がどのように認識しているかを質的に分析することである。</p> <p>方法： 量的と質的要素を用いた横断研究で行った。ポルトガルのある市の学校に通っている2036人の青年を対象に、構造化された自己記入式質問紙を用いて調査した。本研究の質問紙は、青年が認知する飲酒の理由と結果、彼ら自身が考える予防方法を評価するための30の半構造化インタビューを含んでいる。</p> <p>結果： 全体の女子は50.0%、男子は44.9%が、飲酒の経験が有り、女子の4.7%、男子の6.6%が少なくとも月に1回の飲酒をしていた。ほとんどの青年たちは、飲酒が有害で治療することが困難な習慣性があることを認識していた。しかし、この認識は彼らの自分自身の行動に関連していなかった。青年たちは、通常は大量の急速な飲酒と関連するマイナーで一時的な飲酒の影響については認識していた。アルコールの乱用とその影響を予防するために、青年たちには、厳密なコントロールと法的規制、経済対策の一部は、すでにポルトガルで施行されていると提案した。</p> <p>結論： 13歳で飲酒経験のある青年の高い比率は、より早期からの予防の開始の重要性を示していた。今回の結果は、家庭の重要性を強調し、学校での予防プログラムの見直しの重要性を示唆するものであった。</p>	